

シンポジウム

「相談支援充実のための論点」 まとめ

沖倉智美氏 都協議会会長（大正大学教授）
福岡寿氏（日本相談支援専門員協会副代表）

（沖倉会長） 最初に申し上げましたように、残念ですが、皆さんのほうから、直接ご質問を頂戴することはできないのですけども、かわりといっは何かでございますが、私のほうで、今お三方のお話を聞きながら、少し具体的に福岡さんにアドバイスをいただけたところがあればということで、私のほうから幾つかお聞きしていきたいというふうに思っています。それで、まとめにかえさせていただきたいと思っております。

まず、最初に障害相談支援ということで平林さんのほうからお話をいただいたのですが、これは昨年からの移行ということを考え、乳幼児から学齢期、その後もずっと期が移っていくときこそ、しっかりした支援が必要なのだがなかなか難しいということが出ておまして、その中で、きょうもお話に出ましたのが、医療との連携とか、教育との連携、それと乳幼児期の障害計画から、その後、学齢期に移ったときにどうやって行き着いていくかというお話が出されたと思うのですが、そのあたりで。

（福岡氏） 私は、きょうの話、チームで保育園を回っているという話をしましたが、簡単に言うと、年中さんの終わりまでの間に、発達特性のある全ての子供さんに関して親御さんと同じ目線になることが全てで、私ども地域は。

それは医療につながるとか、診断を受けるということではなくて、年中さんの終わりまでには、全ての親御さんたちに発達特性のある子供さんに関してね、我が子は個性なのか、脳機能の整理統合のやっぱりでこぼこがあるのか、あるいは発達障害なのかわからないけど、配慮がいるということをおわかってもらう。配慮していけば、それについての解決の方法を一緒に家族で考えながら、同じ目線の中で関係機関と我が子の育ちを応援していけるんだということさえわかってもえればいいわけで、これをやるために、私ども地域も1歳半ぐらいからずっと親御さんたちが同じ目線になるために、ずっと丁寧にやっていくのですね。

だから、やっぱりそういうような地域づくりをまずしていくしかないわけで、そうすると、そこに新たな予算が要するのかと聞いたら、そんなことはなくて、地域で子供さんにかかわっている保健師、家庭児童相談員、さまざまにかかわっている方たち、就

学相談の方たち、あるいはアウトリーチで入っている児童発達等の関係機関の方たちがいつも同じ目線の中でチームになりながら、親御さんが伴走者になっていくということをつくっていくしかないのですよね。

出来たら、年長さんの1年かけて、うちの子供が通級がいいのか、地元の通常学級でいけるのか、特別支援学級を使うのか、特別支援学校も見るといことを1年かけてやり続けるという仕組みをとにかくその地域、地域の器量でやっていくしかないのですね。

そのときに、やはり意外に医療と福祉と教育というのは、近いようで本当に距離が遠いので、皆さんの市役所だってよくわかりませんが、福祉と教育のセクションが同じフロアにあるのに、廊下を挟むと、まるでイムジン川を渡るみたいなのが通常なのです。何で行政は、発達でこぼこの子供に関して、母子係も、保育係も、就学相談の係も、障害福祉のサービスも一つになろうとしないのか、誰かのり代になるかといったら、多くのところは誰もやろうとしないのです。結局は親御さんが翻弄されて、どんどん言ってみれば、個別の関係をつくっちゃってばらばらになっていくのです。

残念ながら、そののり代をつくるのが、相談センターだったり、医療機関だったりするのですけどね。

やっぱり足立区は足立区で頑張っているのだなと思いました。その器量でやっていくしかないですものね。

けども、本当にそこで移行してやれば、あと見通しいいです。学校に上がった後ですぐに支援会議を始めていく、小学校からずっと支援会議を続けていく、保育園であったことを漏らさず学校につなげる、小学校6年だったらしっかりと中学校に漏れなく引き継いでいく、中学から高校に引き継いでいく、高校から専門学校なのか、短大なのか、就職なのかわからないけども引き継いでいく、これをとにかく本当に最大漏らさずつなげていく仕組みをつくるしかないですよね。

そのとき、私どもの地域で一番機能しているのは、特別支援学校がつくっている連携協議会です。自立支援協議会が頑張るのは当たり前です。でも特別支援学校とか、養護学校が連携協議会をしっかりつくって、その地域の保育園、幼稚園、小・中・高を全て漏れなく集めるような組織をつくるようにしてもらおうということですね。

もうちょっと頑張ってもらおうとしたら、中学校区

ごとに、中学校区にかかわっている保育園、幼稚園、クロスしますけどね、保育園、幼稚園、小学校、中学校のいわゆる発達に心配な子供さんにかかわっているキーパーソン、例えば、保育園だったら誰なのか、小学校だったら特別支援教育コーディネーターなのか、中学は誰なのか、そこは年間頻繁に何回も集まるような場をつくっていく、中学校区ごとにということをですね、一方で頑張ってもらえないです。

ここはどこがというと、やっぱり養護学校が頑張ってくれなきゃだめです。そこはいいですか、学校といえどもそのお座敷に地域の関係機関はいつも入りながら支援会議を開くのは当たり前ですよというので、文化をまずつくっていてももらえないで、全ては同時並行の取り組みが大事だと思いますけど、足立区さん、このように頑張っている取り組みをとにかく同時並行で、本当に大ざっぱな説明でやってもらえないですか。

(沖倉会長) それでは、次ですが、杉並の佐藤さんからは、地域移行のところを特に知的障害を中心ということでお話をいただきましたけども、私どものやっている交流会の2回目のほうで、やはり地域移行と定着の分科会につきまして、いろんな意見をいただいたのですが、やはりそういう場面においても、地域移行の支援に対して自立支援協議会は何ができるのかというあたりが、いつも何でしょうね、エリアが広がってね、杉並の話でもありましたが、他県から移行してくるとかいうことの中で、自立支援協議会は何ができるのかというふうなご意見がたくさんあったのですが、そのあたりいかがですか。

(福岡氏) 杉並の取り組みを聞いて、よく頑張っているなと思いました。本当は入所に入っちゃったら、喉元過ぎればになって忘れちゃうのが多いのに、やっぱり入ったらすぐ支援会議を始める、入ったときが大切ですね。入った瞬間に今度いつ支援会議になりますか、3カ月後ですか、今度いつやりますかをずっと続けていく取り組みでなければ、やっぱり入ったら入りっ放しです。

そのときに、私ども地域自立支援の上で何ができるかということ、先ほども担当者の方が言っていましたけども、無用な入所を食いとめる、要するに、一つはそれですね。地域で支え続けられるのだったら支え続けるだけのことを頑張るのですね。入所されたらされたで、すぐに支援会議を続けていく文化づくりをしていくのですよね。移行していくときには、タイミングが合わなければ出ていけない、地域に資源がちょうど用意されなければ出ていけないと

いうことではね、とても同時並行の取り組みなのですよ。

でも、そのときに私どもの地域の自立支援協議会で今一番話題になっているのは何かといたら、入る前を食いとめる、出た後が安心できるようにしていくというのが、やっぱり今皆さん頑張らなきゃいけないポイントは、地域の安心拠点をどうつくっていくかということです。

今度の来年度からの第4期障害者計画で、いわゆる全てのところに用意していくという安心拠点、杉並区は委託を受けながら安心サポートをやっているというから、少し先取りの取り組みをしていると思うのですが、そういうような面的にやるのか、拠点型になるのかわかりませんが、これをとにかく今自立支援協議会中心でしっかり話し合ってもらって、いわゆる24時間、とにかく困ったときにサポートできるような体制をつくっていただくということが、今最優先の取り組みかなと思いますけど。

うちのところは、安心型拠点づくりの、いわゆる平成21年から安心サポートをずっとやってきたので、その成果を引き継いでいくということです。

(沖倉会長) やめてしまわれましたけど、絶対引きとめたら引きとめてくださるのね。

最後のところで、矢萩さんのほうから、世田谷の基幹相談支援センターの取り組みについて伺いました。

この中でいきますと、今まで触れてこなかったテーマとして、自立支援協議会でまとめられていくなどして、権利擁護、虐待防止の二つが、そのあたりの取り組みがありましたら、ご紹介いただければと思います。

(福岡氏) 私のところの取り組みだと、やっぱり権利擁護センターという一つのを単なる成年後見の受理、手続きだけをやるセンターにするのか、それとも法人後見をやる人と地域の権利擁護システムを全体を考えるような、いわゆる権利擁護センターとしてつくっていくのかということが大きな分かれ目だと思います。

恐らく、だから成年後見センターでつくるのであれば、すぐ行政主導になってしまって、どここの社協かどうか、どここの委託の窓口に任せちゃいがで終わってしまうと、本当に狭い意味での権利擁護になってしまうでしょう。

そうなってくると、やっぱり権利擁護全体、虐待のことも含めながら、地域の権利擁護の啓発も含めながら、その中で法人後見を担いながら、全体の底上げをするとすると、やっぱり自立支援協議会で本

気でそういうところの核をなす方たちに、例えば社会福祉士の「パートナー」の集まりとか、地域の民間の権利擁護をそれぞれ考えている、どこの事業所にも今権利擁護とか、倫理綱領とかをつくっている中心の方がいますからね。そういう方たちとか、あるいは高齢の包括分野の方たちとか入りながら、つくっていくしかないのですね。

そういう中で、私はできれば権利擁護を話し合うのだったら、ただ、成年後見センターがあるからいいんだとか、虐待通報の窓口を受けたときの何かマニュアルさえできればいいんだみたいにならずにね、やっぱり地域の底上げをしていくというような権利擁護部会づくりというのをやっぱり、でも私は世田谷は一つの県ぐらいに大きいところなので、東京都はみんなそうですけども、よくやっていると思います。

本当に同時並行で、いわゆる基本相談も頑張りながら、あれは各エリアごとは一種の基本相談と委託の事業所というね、その上に都道府県レベルぐらいの基幹センターが、さっきの矢萩さんの仕事で、その下に、指定特定があるので、言ってみれば、同時並行でみんなやっているわけでしょう。だから、もう大変だけど、同時並行でやってくださいと。そのときに、いつも中核の人間が忘れちゃいけないのは、うちの協議会での取り組みが呼吸不全になっていないか、血液が循環しているか、過去形になっているようなネタでいつまでも回していないかをいつも考えてもらうしかないですね。

(沖倉会長) そう、それを吐き出してもらうために来てもらったのだから、だめだ、これはじゃない。

(福岡氏) いや、だけど、私の話はだめだ、これはなんで、東京都はよく頑張っています。この何ですか、大都会で、諦めないで同時並行でやってもらうしかないです。本当に。

(沖倉会長) 今何か最後にまとめみたいな話になったのですが、最後に一つだけ、事前通信でもたくさんお書きいただいてまして、基幹相談支援センターだけではなくて、人育てとか、人材をどうするかということについて、幾つもお意見をいただいています、最後に東京へのエールも込めて、人はどうやって育てていったらよろしいんでしょうかね。

(福岡氏) もうこれはあれですよ。志ある方が集まる・集まるでやるしかないですよ。どうしてる・どうしてる・どうしてる、書式どうしてる・どうしてる、ああそうやるの。私は精神得意だけど、こっちもそうなのねとか、あるいは、あなたこの分野は得意ならば、私たちのところの知る限りでこんな

ケース来てねとかとやりながら、もうとにかくもうどうする・どうするで集まってもらうという営みを思った人が集めるしかないですよ。うちのところは仕組みがないなんて言わずにね。そうやって集まりながら、やっぱりOJTをやりながら、インターンシップをやりながら、相互乗り入れしていくというしかないんじゃないですかね。もう簡単に言うと。

その中で、その地域地域の器量で伸びていってもらおうと。

(沖倉会長) 大変無理なお願いをいたしまして、いろいろなことをお尋ねいたしましたけども、今、福岡さんがおっしゃったものの中で、繰り返しおっしゃっていたのは、同時並行という言葉をおっしゃっていますよね。

やはりご自身たちのおやりになっている相談支援事業であるとか、そういった実践をどのように説明していくかと、同時並行ですけど、あれとこれとそれとやっているということを引きちんと人に向かって説明できるということは大事で、今回ご登壇いただいた話題提供者の方もそうですし、福岡さんのパイタリティーあふれるお話は、非常に具体的でわかりやすかったですよね。それをやっぱり積み上げていくことしか我々のやっている仕事、我々と入れてください、私も。

我々が考えているこの相談支援という仕事を人に伝えていき、そこで初めて評価がなされるのだというふうに思っています。

ですから、微々たる取り組みではありますけども、都の協議会のほうでも、きょういただいたご意見等を踏まえて、次につなげていきたいというふうに思っていますので、ぜひ今後もおつき合いいただければいいなというふうに思っております。

きょうは、ずっと最初から最後まで、一番働いていただいた福岡さんに最後に拍手をお願いします。